

栄西と論争した大宰府原山の僧

明庵栄西（1141—1215年）は臨済宗の祖とされ、禅僧として著名ですが、実際には密禅併修で、密教僧としての活動も知られます。

栄西は仁安3年（1168年）と文治3年（1187年）の2度入宋しています。2度目の入宋前、10余年を九州で過ごし、安元元年（1175年）には今津（現福岡市西区）誓願寺を創建するなど、活躍している様子なのですが、史料に乏しく、これまでこの時期の活動はあまり知られていませんでした。

ところが、近年愛知県大須観音宝生院真福寺文庫が所蔵する聖教の中から、栄西が在九州時代に著した著作が発見されました。「改偏教主決」と題する全5巻からなるもので、安元元年に記され、建久9年（1198年）に、再度書写されたものです。これは現在バラバラな状態になっており、いまのところ77紙が確認翻刻され、内容から密教関係の著作であることが分かっています。在九州時の栄西の事績として、非常に貴重な発見といえましよう。

本書の序文からは、大宰府原山に

住む一人の碩徳（学徳すぐれた僧）が栄西の所論に対する4章に及ぶ批判を行い、それに再反論するため著されたことが分かります。

原山は、平成21年3月1日号でも紹介しましたが、四王寺山の南東に位置する山で、天台系の寺院がありました。本書は原山について次のように記しています。



原山は大宰府辺りに所在する名山で、数百人の僧侶が住んでおり、顕教・密教の両方が学ばれている。所は風景がよく、人は賢く道理に通じている。その後方には四王寺が、前面には竈門山が位置している。

原山には、数百人の僧侶が学び修行する、非常に栄えた寺院があったこと、原山の後方には四王寺（四王寺山）、前方には大山寺（竈門山・宝満山）が所在したことなど、当時の大宰府の宗教的な環境がこの記述から分かり、その意味でも大変貴重です。それだけに、この栄西と論争したという原山の学僧の名前が不明なのが、残念でなりません。

市史資料室 朱雀 信城